

音の旅。てくてくてく歩く、

何気ない日常のなか、ある音に、ふと耳を止める瞬間がある。
その音の、その言葉の、その旋律の何が自分を揺さぶったのか。

それを知りたいと、そう思った。

その歌のつくり手は、弓削田健介さんと、いった。



弓削田健介

Kunsuke Yugeta
作曲家・シンガーソングライター

「小さい頃から歌は好きでした。でも、ただ普通に好きなかただけ。その頃はどちらかというとスポーツ少年で、空手やバレーボールをやっていました。本格的に『歌』をはじめたのは今から8年ほど前になります。もともと小学校の先生になりたくて大学に入ったのですが、教育実習やその頃始めたホスピスでの活動で改めて『子どもの頃にみんなで歌う歌』の素晴らしさを感じて、子どもたちが歌ってくれる曲を作ることができるようになりました。そんなこともあり、先生になる夢から方向転換して、大学院では作曲を専攻して子ども達に歌える合唱曲を作るための勉強本格的に始めたんです」

夏の終わりの午後、窓からブラインド越しに漏れる光はまだ少し眩しい。
この日、健介さんに初めて会った。ゆっくりとした口調で喋る彼はいたって自然体で、イマドキの若者とは一線を画す様子がかえって目を惹いた。

「ホスピスで演奏するようになったのは大学3年の頃、当時ジャズピアノを習っていた先生がホスピスで演奏活動をされていて、声を掛けていただいたことがきっかけでした。

いつもは激しい演奏をされている先生が、聴く人に寄り添うようにして曲を弾く姿。そしてそれに合わせるように歌っている患者さん、ご家族の方、看護士さん。もう少しで生命が終わることがわかってる人たちが、昔、お母さんや友だちと歌った曲をくちさんでいるんです。

音楽って凄い力があるんだな！と、頭で考えるのではなく自然に、そんな言葉がすっと胸に落ちてきました。

自然にくちさめるシンブルな歌の中に、たくさんの思い出がつまっているんだ、と気づかされた瞬間だったかもしれません。ホスピスで活動するようにな



つてから、やさしくてなつかしい、誰かの想い出に寄り添って一緒に歌えるような、そんな曲をつくれる作曲家になりたい、とより一層、強く思うようになりました」

次の転機は大学院を出てすぐの頃、ある絵本に携わったことだった。

「3年ほど前ですが、『いのちのまつり』という絵本のテーマソングを作ったんです。この絵本は武雄市在住の陶彩画家・草場一壽（かずひさ）さん原作の、時の流れの中で感じるいのちの大切なつながりを描いた物語です。

大学生の時のホスピスでの経験もひとつの契機となり、生命の大切さや尊さ、そして大切な人を思う気持ちを大事にしながら音楽を続けていきたい、と思っていたので、このお話をいただいたときは嬉しかったし、運命的なものを感じたのをおぼえています」

ある出会いが人生の歯車を回す時がある。

健介さんが「音楽」に向かった本心に動きだしたのは、実はこの時からだったのかもしれない。

「作者の草場さんと絵本を朗読する副田さんと3人で、『いのちの講演会』で全国をまわるようになってから活動の幅が広がりました。『おはなし＋読み語り＋音楽』をワンセットで楽しんでいただく会なのですが、どの会場でもいろんな反応をいただけて、そのたびにいろんなことに気づかされます。

それと並行して、今年から県外でのソロの演奏会も増えてきました。そんなふうに動き始めたら、今度は行く先々で『一緒にミュージカルをつくろうよ』とか『一緒に演奏会を開こうよ』とか声をかけていただく機会も少しずつ増えてきて。そういう人たちや、『子どもたちのために』と頑張って各地でいろんな活動をされている方、そして子ども

たちに出会えるのが旅の一番の楽しみです。

そうやって旅で感じたものを持ち帰って、佐賀で新しい曲作りをして、また旅に出る。

それが今のスタイルです」

3年前から健介さんはティーンズ・ミュージカルSAGAの作曲を担当している。2004年に発足した、子どもによる本格的なミュージカルの創作を目指した劇団だ。

「他県で出会った合唱団と比べると『合唱の歌唱力』という面ではまだまだ敵いませんが、合唱団と違ってダンスも演技も、ポピュラー曲のようなソロもあるミュージカル団体ですから、それは仕方ないと思います。違うジャンルですものね。そのかわり表現力という面では、ずばぬけて凄い！いままでたくさんの子どもたちの団体と出会いましたが、どこにもない輝きを、ティーンズは持っていると思います。いきいきと歌い、表現をする子どもたちにはいつも感動をもらってますし、ティーンズは佐賀に



ある宝物の一つだと思います。

旅先で出会う合唱団にティーンズミュージカルSAGAの映像を見せると、みんなびっくりするんですよ。『どうやってこんなに子どもたちが輝くんですか？』って。僕は普段のレッスンにいつも行っているわけではないので、これは、僕の指導が良いとかではないです。代表の栗原さんや、まわりでサポートしているダンスや音楽の先生、保護者さんたちの熱い応援や温かい雰囲気、子どもたちをいきいきと育ててくれているんだと思います。

これからは、旅先で出会った素敵な人やエピソードを題材にミュージカルを作って、たくさんの方からご要望いただいている『合唱ミュージカル作品』として、全国に発信していきたいと思っています。ティーンズで作った振付や歌や表現をビデオに撮って、旅に持って行きます。そして、いずれは他県からティーンズを見に、佐賀に来てくれたらいいなと思います」



そんなふうに分かること、そしてこれからのことを柔らかく語る

健介さんの地元・佐賀でのホーム

グラウンドは、佐賀市歴史民俗館「旧古賀銀行」の中にある「浪漫座」。

ここで健介さんは「ツインマーマ

ンの夢」という定期コンサートを開催している。

「18世紀にドイツのライプツヒにあった『ツインマーマンのカフェ』。そこではバッハの指



弓削田健介 ゆげたけんすけ/作曲家・シンガーソングライター

ホームページアドレス <http://yugemusic.com/>

ツインマーマンの夢 <http://yugemusic.com/zdream/>

ティーンズミュージカルSAGA <http://yugemusic.com/tms/tms-top>

揮で毎週若手演奏家によるコンサートが開かれ、そこからアーティストが世界へ羽ばたいていったそうです。佐賀でもそうし力して始めました。毎月第3土曜日に開催するこのコンサートも、今年で50回目：あつという間の5年間でした。クラシックから弾き語り、太鼓にダンス、いろんなジャンルの演奏者さんに毎月3組出ていただき、終わったらお客さんも含めて大交流会をしています。これからも子どもたちの歌や佐賀の演奏家さんの音を、もっともっとたくさんの人に届けたいですね」

つても5年間、人が生まれてから翌年には小学生という期間だ。それをあつという間だったと語る健介さんの顔はいたって穏やか。音がみんなをつないでいくのかもしれない。さまざまな出来事を音が洗い流してくれる。これまでも、そしてこれからも。

佐賀でひとつのコンサートを5年の間続け、そしてこれからも続けていくと何気なく語ってくれたように、もしかしたら凄いことを涼しい顔である日ひよいと成し遂げてくれるかもしれない。そんな予感を感じた夏の午後。

緩やかにおだやかに、でも思いは強く。健介さんの「音」探しの旅は、これからも続いてゆく。